205080-000-8

41-93

大井川行幸和歌

[出版事項不明]

EDV-0081

大井川行幸和歌

大井川行幸和歌は眞淵云、今上に行幸といひ上皇には御幸といふなりされども三代實錄まではそのわかちも見えず西宮抄にはわけて書けり其ころよりにや云々といはれしが如く類聚國史の標目にも天皇行幸太上天皇行幸とありて行幸御幸とわけてかゝざれば貫之のぬしのころまではうのあかちなかりし事と見えたりされば寶ゐ法皇行幸なれど貫之のぬしの時代に從ひて行幸とは記せり　いつのころにか、はろびうせたりけむ、今の世には序のみ傳はれり、そは貫之のぬしの作にて、古くは古今著聞集（師の藏本）に異本に此行幸の一條をのせざる本ありそをふしとはおもへど流布の本にのせたればしばらくそれに從ふのみ　又扶桑拾葉集、土佐日記附注にものせたり、これらかたみにいざゝかのたゞひあり、今予が藏本萩原宗固自筆の校本、又古寫本一本をもて校合せり、そも〳〵此御幸の事は日本紀略、古今集、大鏡、大和物語、古今顯昭注などにも見えたり、なほ此外にもありぬべけれど、とゝくゝくあぐるにいとまなし、これらの書に見えたる所、まち〳〵にて、あるは天皇行幸とし、法皇御幸とし、あるは昌泰元年とし、延喜七年とし、延長四年とすれど、實は延喜七年九月十日にて、寛平法皇の御幸なり、天皇行幸は翌日九月十一日あり、さるを眞淵翁の百人一首初學の中なる大井川行幸御幸の考に、諸書を引きて貫之のぬしの序をかゝれしは、延喜七年九月十一日にて、天皇行幸のをりあるよ

し、さだめられて、さていふ、古今集に法皇西河におはしましたりける日、つる洲にたてりといふことを題にて云々、又法皇西川におはしましたりける日、猿山の峽にさけぶといふことを題にて云々、各の諸書に（こゝに諸書とあるは是則頼基集拾遺集などなり）此題詠あり、しは、行幸のたびとせるに、ひとり古今にのみ法皇とあるは、誤なるべし、それぞ中に日本紀略に延喜七年九月十一日大非川行幸とあり、これ今日は、もはら行幸なり、しかれば古今に今上とか天皇とかありつらむを、例の後人心得たがひて、法皇とかきかへたるなるべしといはれつるぞ、おかく（に誤ならむ、（拾遺集是則頼基集などに行幸とありとてもこれらの書によりて撰集のはじめなる古今を誤るがはしがたかるべしもうのうへかみの分注にもいへるが如く行幸御幸とわかちてかゝざりし世なれば古今によりたりともこれらの集をも又誤るはいひ難しかくいふ證は古今に法皇とありて、躬恒集にも亭子の帝の大井におはしませる時に、九の題の歌秋水にうかべり云々とあるうへに、此書の小序にも重陽後朝太上法皇幸大堰河戸名瀬以眺望又今上幸河邊云々とありて、序にもあはれ我君の御代ながつの月の九日と昨日いひて云々とあり、九月十一日の行幸のをりならば、一昨日とこそいはめ、重陽後朝、又は九日と昨日いひてあるべからず、されば此御幸は九月十日なると論を待たず、しかも日本紀略延喜七年の條に、九月十日甲申法皇召文人賦眺望九詠之詩云々、十一日乙酉天皇

幸大堰云々とありて、顯昭古今注に清輔云、此御幸如貫之假名序者延喜七年九月十日也、法皇主上相共臨幸云々、件九詠和歌有忠峰假名序、兩人之條不審若擬作歟云々ともあれば、日本紀略に法皇御幸の事はなけれど、序中にのせたる九首の題を顯昭古今注に九詠とあれば、紀略に九詠とあるも、此九首題の事なるべし、さかも顯昭注にも九月十日也とあるを見ても思ふべし、又紀略に九詠之詩とありて歌とあらざれば、かたぶかるゝに似たれど、古く萬葉にも歌を和詩といひ、長歌を賦ともあれば、詩とありても、歌のことゝこそおもはるれ、そのうへこのころは、もはら何事をも漢藉めかしく書ける世なれば、歌のことをも詩とは書けるなるべし、又九詠の詩と歌とを奉りしにもあるべし、上にもいへるが如く、此御幸は延喜七年なるを、うのをりによめる貫之の「あしたづのたてる河べを吹く風によせてかへらぬ浪かとぞ見る」又躬恒の「わびしらにましらな鳴きそあしびきの山のかひおる今日にやあらぬ」云々の歌どもの、延喜五年に撰進せる古今集に入れるは、いかにぞやとおもはるれど、ては撰進せし後に加へられたるなるべし、亭子院歌合は延喜十三年、泉大將定國公の四十賀は躬恒集を考ふるに、延喜十四年なるを、これら皆古今集に入れられたるを見てもおもふべし、はじめにも記せるが如く、

此書の序はこれかれに見えたれど、歌は今の世に傳はらねば、撰集あるは家集などにつきて、さがしもとむるに四十八首ばかりは見出でたり、此四十八首の中躬恒集に十九首見えたり（うは九首題なおの〳〵二首づゝよみて其中旅雁の題のみ三首あれば、十九首とはなれり、これらを殘らず奉りしものにはあらざるべしこは後世のかへ歌などいふものにて全く奉りしは九首なるべし）小序に六十三首とあれば、なほあまたたちざれど、ものに見えねばいかゝはせむ、このをりの作者は顯昭注に、貫之、躬恒、忠峰、是則、伊衡、頼基等歟とあれど、さては六十三首の數にあはず、貞信公を入れて七人とする時は、おの〳〵九首題の歌を奉りて六十三首なるべし、こもこゝろみにいふのみ、（以上井上文雄氏考證）

重陽後朝　太上法皇幸大堰河戸名瀬以眺望又　今上幸河邊即有　勅喚漁渚好事者各獻秋思和語六十三首應製并序

内膳典膳正六位上紀朝臣貫之上

重陽は九を陽數といひ、陰暦九月九日なり、重九ともいふ、太上法皇は宇多法皇、亭子院ともまうす、大堰河は山城葛野郡小倉山のほとりにて、上は清瀧、下は桂なり、戸名瀬は大井川の内なり、寛平菊合、惠慶「大井川川べの紅葉散らぬまはゞなせの岸に長居しぬべし」金葉集秋に「大井川散るもみぢ葉にうづもれてとなせの瀧は音のみぞする」新勅撰集賀に「大井川ふるき御幸の流にてとなせの水も今日ぞすみける」など見えたり、好事者は漢書王褒傳に「使褒作中和樂職宣布詩選好事者令依鹿鳴之聲習而歌之」孟子萬章上に「孟子曰否不然也好事者爲之也」とあり、こゝは文事を好むものをいふ、内膳典膳は古今集目錄貫之の條に延喜七年二月廿七日任内膳典膳とあり、内膳は内膳司にて御膳の事を掌る、典膳は内膳司の次官なり、長官は奉膳といふ、文雄云、此小序は、かたぶかるゝふしも見ゆれど、宗固本にのせたれば、たゞうのまゝに記しおきつ、

あはれ、わが君の御代長月の九日と昨日いひて、殘れる菊ををしみ給ひ、暮れゆく秋をもをしみ給はむとて、月のあつらのこなた、春の梅津より御船よそひて、わたし守をめして、夕月夜をぐらの山のほとり、ゆく水の大井の川べに行幸したまへれば、

長月は夜長月の義にて九月をいふ、うれに御代長かれてふ意にてわが君の御代とつゞけたり、かつらは桂の里桂の川とて葛野郡にあり、月中に桂樹ありてふ意にて、月のと添へたり、古今集物名に「秋くれど月のかつらのみやはなる光を花と散らすばかりを」名所今歌集に本居春庭「春の夜は月のかつらの里人も風をやたのむ霞む光に」とあり、梅津も同郡なり、拾遺集雜下に「名のみしてなれるも見えず

梅津川ゐせきの水ももれば「なりけり」名所今歌集に村田春海「高瀬さすしづが袖さへかをるなり春の梅津の花のさかりは」とあり、春咲く梅てふ意にて春のと添へたり、夕月夜は小倉山の枕詞なり、小暗き意にて、かくつゞけたり、古今集秋下に「夕月夜をぐらの山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらむ」夕されば「をぐらの山ともつゞけたり、萬葉集八に「夕されば「をぐらの山にふす鹿の今宵は鳴かずいねにけらしも」とあり、ゆく水のは躬恒集に「とゞむれどとゞめかねつも大井川ゐせきをこゑてゆく水のごと」とある意にて、川の枕詞なり、

ひさかたのそらには、たなびける雲もなく、みゆきを待ち、流るゝ水底には、濁れる塵なくて、御心にぞうなへると、みことのりして、おほせ給ふ事は、秋の水に浮びては、流るゝ木の葉とあやまたれ、秋の山を見れば、織る人なき錦とおもほえ、もみぢの葉のあらしに散りて、曇らぬ雨と聞え、菊の花の岸に殘れるを、そらなる星と驚き、霜の鶴、川べにたちて、雲のをるうと疑へれ、夕の猿、山の峽に鳴きて、人の涙を落し、旅の雁、雲路にまどひて、玉づさと見ゑ、遊ぶうもめ水に住みて、人に馴れたり、入江の松、幾世經ぬらむ、といふ

ことをぞよませ給ふ、

ひさかたのは、そらの枕詞、みゆきは行幸に見ゆてふをかけたり、濁れる塵とは、すこしおだやかならぬこゝちす、「塵だになくて」などあるべきにや、みことのりしてはのたまひてといふに同じ、秋の水に浮びてはといふより入江の松幾世經ぬらむといふまでは、九題の事をいへり、秋の水に浮びてはは秋のけしきの水にうつりてはといふ意なり、織る人なき錦は六帖に「唐衣立田の山のもみぢ葉ははたものもなき錦なりけり」とあり、曇らぬ雨は新古今集秋下に「入日さすさはの山べのはゝう原曇らぬ雨と木の葉降りつゝ」とあり、うらなる星は古今集秋下に「ひさかたの雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける」とあり、霜の鶴は霜のやうに白き鶴なり、雲のをるは白雲の居るなり、夕の猿山の峽に鳴きては藝文類聚に峽中猨鳴至清諸山谷傳其響冷々不絶行者歌之曰巴東三峽猨鳴悲猨鳴三聲淚霑衣とあり、旅の雁云々は後拾遺集上に「わきもこがかけてまつらむ玉づさをかきつらねたる初雁の聲」とあり、玉づさは玉の梓弓なり、射やる意にて、書をやる使の枕詞に用ひたり、後にはたゞちに文の事を玉づさといへり、よませ給ふは貫之等によませ給ふなり、

我等短き心の、このものにまどひ、拙き言の葉、吹く風のうらに亂れつゝ、草の葉の露とともに、うれしき涙落ち、岩涙とともに、よろこぼしき心ぞたちかへる、

このもかのもには、いかによみ出でむと、さまゞに惑ふとなり、拙き言の葉云々は、いかによみ出でむと詞亂るてふ意を、木の葉のうらに亂るゝさまに書けり、たゞし「ふく風のそら」といへる、おだやかならぬこゝちす、露とともに云々は山家集上に「暮れぬめり今日まちつけてたなばたはうれしきにもや露こぼるらむ」とあり、岩涙とともに云々は、うれしき心のさまを、岩涙にたとへてたちかへるといへり、よろこぼしきは喜ばしきに同じ、伊勢物語に「よろこぼひておもひけらしとぞいひをりける」とあり、

もし此言の葉、世の末まで殘り、今を昔にくらべて、後の今日を聞かむ人、あまのたくなはくりかへし、しのぶの草のしのゞざらめや、

もし此歌世に殘りて、後の人の古今をくらべて、今日の事を知らば、くり返し〳〵此かしてきおはせを戀ひ慕ふべしとなり、あまのたくなはは後拾遺集序にこれ

らの集に入りたるは、あまのたくなはくりかへし」とあり、たくなはは拷の糸してなへる繩をいふ、くりかへしの添言なり、しのぶの草のは、しのぶ〳〵とかさねたるにて添言なり、しのばざらめやは、しのばざらむやは、しのぶべしといふ意なり、

法皇西川におはしましたりける日、鶴洲にたてりといふことを題にてよませ給ひける　貫之

西川は大井川をいふ、續古今集夏に「なるたきや西の川瀬にみそぎせむ岩こす涙も秋や近きと」とあり、

あしたづのたてる川べを吹く風によせて返らぬ涙ぞとぞ見る

此歌古今集雜上にあり、あしたづは鶴のことなり、多く鶴のたてる川べのさまを、風にてうち寄せたる涙の、たち返らで殘れるかとおもひたりとなり、鶴の白きと涙の白きと似たれば、かくよめり、續後撰集春下に「紫の藤江の岸の松が枝によせて返らぬ涙ぞかゝれる」とあり、

延喜の御時大井に行幸ありて人々に歌よませ給ひける

大井川べの松に言とはむあゝるみゆきやありしむかしも

此歌拾遺集雜上にあり、かゝる行幸は昔ありしやいかにと松に問へるなり、

亭子院西川におはしましたりける日、江松老といふことを題にてよみ侍りける　　參議伊衡

江に深く年は經にける松なれどかゝる行幸は今日や見るらむ

此歌續古今集雜中にあり、多く年經たる松なれど、かゝる行幸は今日はじめて見るならむとなり、

亭子の帝の大井におはしませる時に九の題の歌、秋の水にうかべり　　躬恒

此川に木葉とうきてさしあへりみは今日よりぞみなれそめぬる

木の葉とうきては夫木集に「水もせに紅葉の舟をむやひつゝ錦帆にかけて風ぞ漕ぎゆく」さしかへりは棹さしてゆきかへりといふ意なり、みはは身はにて、かへりみにかへり見といひかけたり、みなれそめは水馴初なり、これも見なれうめといひかけたり、古今集戀五に「よそにのみきかましものを音羽川渡るとなしにみなれそめけむ」拾遺集戀一に大井川くだす筏のみなれざをみなれぬ人も戀しかりけり」源氏寄木の卷に「うちわたしよにゆるしなきせき川をみなれうめけむ名こうをしけれ」とあり、

秋の涙いたくなたちそおもほえず浮木にのりてゆく人のため

浮木は和名抄に查唐韻云槎字亦作查樝和名字岐々水中浮木也、神代紀に一書云、以無目堅間爲浮木以細繩繫之火々出見尊而沈之、博物志卷十に舊說云天河與海通近世有人居海渚者年々八月有浮槎去來不失期とあり、

秋の山にのぞむ

今日なれば小倉の山のもみぢ葉は底さへてりて見え渡るらむ

行幸ある今日なれば、小暗しといふ小倉山の紅葉も、色はえて水底まで見え渡るらむとなり、

秋霧のはるゝまに〳〵見わたせば山の錦はおりはてにけり

紅葉れつ

水のおもものから紅になるまでに秋にあひぬねおつるもみぢ葉

下句一本に「秋にもあへずおつる紅葉か」とあり、

風に散る岸の紅葉は後つひに瀧の水こそおとしはてつれ

菊のこれり

菊の花今日を待つとて昨日おきし露さへ消えず今さかりなり

君がためこゝろもしるく初霜のおきて殘せる菊にぞありける

鶴洲にたてり、

鶴のゐるかたにぞありける白妙のあまの濡衣ほすと見つるは

うらわきて風や吹くらむ沖つ浪おなじところをたち歸りつゝ

旅の雁

故郷をおもひやりつゝゆくありの旅の心はそらにぞあるらし

此歌續千載集秋上にあり、心はそらは心のおちつかぬをいふ、萬葉集十一にたもとはりゆきみの里に妹をおきて心そらなり土はふめども伊勢物語に野にあり、けど心はろらにて、源氏夕霧の卷に山がつのまがきをこめてたつ霧も心ろらなる人はとゞめず とあり、

年でとに友ひきつちねくる雁をいくたび來ぬと問ふ人ぞなき

秋でとにくるありがねは白雲の旅のそらにやよをつくすらむ

あゐめなれたり

なれてこし沖のあゐめはつげなくに後の心をいかで知るらむ

列子黃帝篇に海上之人有好鷗鳥者、每旦之海上從鷗鳥游、鷗鳥之至者百數而不止、其父曰、吾聞鷗鳥皆從汝游、汝取來、吾玩之、明日之海上、鷗鳥舞而不下也云々 注云鷗與鷗通用とある故事をよめるなり、

洲にをれはいさでの色にまがふ鳥手にとるばかり馴にける哉

猿かひになく

わびしらに猿な鳴きそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ

此歌六帖二、古今集誹諧に入れり、わびしらには、わびしげになり、ましらい猿の梵語なり、かひに足引の山の峽とかけたり、行幸ありてかひある今日なれば、かなしげに鳴きそとなり、

心あらばみたびてふたび鳴聲をいとどわびたる人に聞かすな

六帖二に二句「みたびふたゝび」下句「物思ふ人に聞かせざらなむ」とあり、みたびてふたびは白氏文集十五に三聲猿後垂鄉淚一葉舟中載病身とあり、

江の松老いたり

深みどり入江の松も年ふればあげさへともに老にけるかな

此歌玉葉集雜三に入れり、次の「江に深く年經る松は」てふ歌に同じ意なり、

老にける松ぞ知るらむあゆ川の行幸もかくはあらずや有けむ

あゆ川一本にある川とあり、文雄云、あゆ川ある川、ともに地名かともおもへど、さる地名見あたらず、又こと所の地名をよむべくもあらず、かにかくに誤ならむ、もしありしよのなどにやゝは延暦大同世々の行幸ありし所なればなり、又新撰六帖第三に行家あさな〳〵日つきそなふるかつら川あゆみをはこぶ道もかしこしとあれば、挂川をあゆ川ともいふべきか、こはたゞこゝろみにいふのみ、猶可考

大井に行幸に秋の山　是則

秋の色は千種ながらにあはれるを誰ゐをぐらの山といふらむ

續後拾遺集秋下に入れり、かれるを、一本にさやけきをとあり、文雄云、一本のかたまされり、そはをぐらの山に對すればなり、

紅葉水にうゐぶ同行幸に

いづかたゐとまりなるらむ山風の拂ふ紅葉に船路まどひぬ

船路まどひぬは月清集下に「つなて引く竹の下道霧こめて船路にまよふ淀の川岸」とあり、

紅葉散る大井の行幸に

もみぢ葉のおちて流るゝ大井河せゞの柵あけもとめなむ

續後撰集冬に入れり、考證には四句「せゞの白波」とあり、白波にては聞え難きやうなり、

大井の行幸に菊の花のこれり

うゑげさへに今はと菊のうつろふは浪の底にも霜やおくらむ

新古今集冬に入れり、浪の底にもは山家集上に「水の面に宿る月さへ入りぬるは浪の底にも山やあるらむ」古今集秋下に「一もとゝおもひし菊を大澤の池の底にも誰か植ゑけむ」とあり、

旅の雁、大井河の行幸に

いくさとのゐある道なれや秋ごとに雲ゐの旅を雁のゆくらむ

江の松老いたる大井の行幸に

此川の入江の松は老いにけりふるきみゆきの事やとはまし、

續古今集雜中に入れり、ふるきみゆきは日本紀略に延暦十四年六月壬戌幸「大堰」とあり、其後行幸たゆることなし、ことく〳〵くわぐるにいとまあらず、

鶴洲にたてり同行幸に

山近みおりゐる雲とまな鶴のたてる川べを人や見るらむ

新千載集雑上に入れり、まな鶴は白き鶴をいふ、堀川百首に「天の原雲ゐに遊ぶまな鶴をふりさけ見つゝよはひ経ぬべし」とあり、

かもめ人になれたり同行幸に

ゆく船になるるゐもめはさす棹のゐへす涙にぞ誤またれける

猿かひに鳴く同行幸に

秋山のゐひにみゐへり鳴く猿を夜深く聞きて袖ぞぬれぬる

みかへり鳴く猿は、本朝文粋三に胡雁一聲秋破商客之夢巴猿三叫曉霑行人之裳とあり、

大井河の行幸にさまくの題どもをよませ給ひしに秋の水に浮ぶといふ題を　　頼基

いろくにうつる心も秋の水紅葉ながすと人や見るらむ

秋の山を

白露はわきてれゐじを秋山のなどゐ紅葉のうらこがるらむ

うらこがるは拾遺集冬に「神無月時雨しぬらしくすの葉のうらこがる音に鹿も鳴くなり」とあり、

紅葉散る

もみぢ葉の流れうづまく淵をてそ暮ゆく秋のゐたみとは見め

六帖六に躬恒「もみぢ葉の流れてよどむみなとをぞくれゆく秋のとまりとは見る」とよめるに似たり、うづまくい堀河後度百首に「谷川に流れて花のうづまくは岩根の瀧の涙かとぞ見る」とあり、

旅の雁

すむ里のさだめなければ旅の雁そらにぞうきて鳴き渡るなる

菊の花

行幸をば今日とやかねてきくの花昨日の色のあせでのこれる

あせでは色のさめぬをいふ、風雅集春中に「故郷に咲けるものから櫻花色はすこしもあせずぞありける」とあり、

鶴洲にたてり

川近みすまひすればやまなづるの流れて千歳ありといはるゝ

川近みは川近くといふ意にいへり、すまひすればやは鶴のすまひすればやなり、

流れて千歳は千歳も世に流れてありとなり、

あもめなれたり

白浪や身によせあゝるとものおもはでたちも騒がずなるゝ鳥哉

こは次の「白浪のこせどもたゝず」てふ歌に同じ意なり、

江の松老いたり

江に深く年ふる松は水底のかげにさへこそ色は見にけれ

多く年經たる松なれば、うち見たるさまゝさらなり、水にうつれるかげまでが年經て見ゆとなり、

秋山をのぞむ　大井行幸

秋山の紅葉見しまに日も暮れて立田姫にや宿はあるらむ

紅葉のおもしろきけしきを見し間に、日ゝ暮れたれば、いづれへか宿らむとおもふに、立田姫の秋山にいますとかいへば、うてに至りて宿を借らむとなり、

紅葉おつ　大井行幸

いろ〳〵の木の葉おちつむ山里は錦にとめるなき名たつらむ

なき名たつらむは錦おど山里に無きを、紅葉のつもれるを見て、錦に富めるとて、

無き名の世に高くなるらむとなり、

菊　大井行幸

霜わけて咲くべき花もなきものを色を殘して人をたづぬる

色を殘しては咲くべき花もなきころなれど、霜のみはなは咲き出でゝ色香を殘すとなり、

旅の雁　大井行幸

むかしより春たちかへり秋は來ぬいづこを旅の光といふらむ

文雄云、光の字必ず誤字なり、广の字のあやまりなるべし、

大井の行幸

年ふかくねさし入江の松なれば老のつもるは波や知るらむ

老のつもる新拾遺雜中に「六十あまりおなじころゆく月を見て老のつもれるはどゞ知らるゝ」とあり、

同題

水かげをえにける松はいとゞしく波の上にやおひまさるらむ

鶴洲にたてり　大井川行幸

まなづるをたちねなうせる潟の洲に千歳の跡を殘さゞらめや

かもめなれたり大井行幸

白浪のてせどもたゝずむれぬつゝ人になつうでみなれたる哉

たゝずは立去らず、みなれは水馴の意なり、

亭子院大井川に御幸ありて行幸もありぬべき所なりとれば

せ給ふに事のよし奏せんと申して　小一條太政大臣

をぐら山峰のもみぢ葉心あらば今一たびのみゆきまたなむ

此歌拾遺集雜秋、百人一首、大鏡には二の句「もみぢの色も」とあり、小一條太政大臣は基經公の第四子、太政大臣藤原忠平公にて天暦三年小一條の第にて身まかりぬ、御年七十、貞信公と諡を賜はりき、

大井川行幸和歌　終